

乗り越し

昔乗り慣れた電車に乗り
昔下り慣れた駅で下り
昔歩き慣れた坂道を行くと
花の香りが漂っていた

妙に穏やかな春の陽射しは
かえって私の不安をかき立て
妙に肌になじんだ感じのする大気は
死後の世界のものかと思わせた

誰ひとりとして私を見やる者はなく
さも私の存在が当然とばかり通り過ぎ
それにつられた私とて
ついチャイムも押さずに家の鍵を開けてしまった

家には誰も居なかった
それは好都合なことだった
無為の中に己を溶かし込み
ひたすら待ち続けるには・・・

しかし、それはできなかった
できる筈もなかった
私には脱ぎ捨てるべきものが多過ぎ、また
それに必要な時間も多過ぎたのだ

私は中断しなければならなかったが
言うまでもなくそれは
何もなかったことと同じことだった
私は再び厚い鎧を着なければならなかった
己自身の重さの何百倍もする厚い鎧を・・・

帰途の電車は混雑していた
この中に己自身の重さを感じている者が
はたして一人でも居ただろうか
全てが装飾に包み込まれた世界にあって
そもそも己を裸にすることなどできるのだろうか
私とて同じことだ

同じことだ・・・

(1990.5.8)